子どもたちの未来を考え進めたい資金づくり

受験シーズン本番。受験生が体調を整えながら集中力を高める一方で、合格後の入学金や授業料の調達に頭を悩ませる保護者も多いはず。入学が決まってから慌てないためにはどうすればいいのでしょうか。愛知産業大学経営学部の奥田真之教授に大学進学にかかるお金と準備方法についてうかがいました。

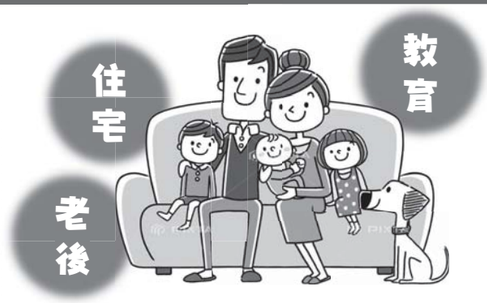
人生の3大資金「教育」「住宅」「老後」を考える

人生で特にお金がかかるライフイベントは教育、住宅、そして老後で、これらのための資金を「人生の3大資金」と呼びます。計画的にお金をためて、このハードルをいかに越えていくかがライフプランニング、人生をお金に困らず暮らしていくポイントです。

とりわけ教育資金は、子どもが生まれた時点で必要になる時期がある程度決まります。そのため生まれたと同時に準備を始めることが、教育資金の基本的な考え方と言えるでしょう。

ただ、他の住宅、老後の資金と異なり、収入の少ないうちから必要になることも多いため、大学進学時に狙いを合わせ、コツコツと貯めていくことが大切です。確実にお金が用意できるよう、銀行預金や学資保険などを利用して着実に増やしていきましょう。

教育資金を株式など値動きのある金融商品で運用すると、子どもの大学進学のタイミングでバブル崩壊やリーマンショックのように株式相場が大きく崩れた場合、予定したお金を用意できない事態になりかねません。教育資金に関しては安全第一。確実に無理の無い範囲で計画的に考えていきましょう。



教育資金準備のポイントは「コツコツ」貯める

それでも教育資金が不足した場合、奨学金や教育ローンなどを利用して用意することになりますが、貸与型の奨学金や教育ローンは返済の必要があります。教育ローンは親の信用でお金を借りるもので、返済は親がするため子どもに負担はかけません。貸与型の奨学金は子どもが社会人になってから返済します。貸与型奨学金は借金であり、子どもが社会人としてスタートする段階で借金を背負っていることは、生活していく上で大きな負担になることを、子どもも親もよく理解しておかなければなりません。

大学卒業までにかかるお金はどれくらい？

金融広報委員会の試算（2014年）によると、大学を卒業するまでにかかるお金は国公立文系の自宅生で500万円強、私立理系の自宅外生で1千万円強必要です。

内訳は、入学金と授業料で約240万円、入学金・授業料以外の支出は自宅生で約280万円、自宅外生で560万円です。

経済学的に考えると、大学に4年間行くということは、行かずに4年間働いてもらえるはずの給料を放棄して将来のために能力を身に付ける選択をしたわけです。それを機会費用と言います。仮に高卒後就職して年間250万円の収入があったとすると、4年間で1千万円の機会費用が発生します。この機会費用を含め、大学進学にかかる費用を上回る能力を身に付けることが大切。授業で寝ていたらもったいないですよ。

大学4年間にかかるお金

	自宅生	自宅外生（寮生除く）	うち入学金・授業料
国立	520万円	800万円	240万円
私立(文系)	700万円	980万円	420万円
私立(理系)	850万円	1,130万円	570万円
例:医学部	2,760万円	3,040万円	2,480万円

※金融広報委員会による試算